

少しずつ暑い日が増えていく、初夏。

もう道に迷うことはなくなったけれど、今日は配達のことでもルルに相談しなければいけないことがあった。

「ただいま」

「おかえりなさい」

ルルが自然に手を伸ばす。

それは俺から薬籠くすりかごを受け取る仕草だったけれど、今日はその手に籠を渡せずにいた。

「ツバメ？ なにかあったの？」

「実はね……」

汗を拭いながら、俺は今日あったことを伝える。

フォルが薬を嫌がっていること。

母親が薬を受け取ろうとすると、フォルが泣き出すので受け取れないと言われたこと。

「じゃあ、薬は……」

「持ち帰ってきちゃった……。ごめんね」

「いいえ。でも、フォルの薬は体調を維持しやすくするためのものだから……」

「毎日飲まなくちゃいけないんだよね」

「そう。効果が実感しにくいから飲みたくないっていう気持ちもわかるけれど……そうね、私が説得に行くわ」

「え？」

「ツバメも来て。次にこういうことが起こったときのために、私がどう説得してるか、聞いておいてほしいの」

「うん、わかった。でも、今のフォルだったら俺を見ただけで泣いちゃうかもしれないから、少し離れたところで見てるね」

「ええ。じゃあ行きましょうか」

こうして、俺たちはフォルの家へ向かった。
少し離れた位置でルルを見守る。
母親とやりとりをしたあと、フォルと話すルルの声が聞こえてきた。

「……そうね、薬を飲んでも風邪をひいたり熱を出すこともあるわ。
でもそれは意味がないってことじゃないのよ。これは、そういうと
きに苦しくなるのを和らげるための薬なの」

フォルと視線を合わせて話すルルの声は、真剣だ。
はじめはうつむいていたフォルも、ルルの言葉に顔をあげていく。

「……薬を飲むのは嫌かもしれない。でも、これはあなたを守るた
めの薬よ。自分を守るために、飲んでもらえるとうれしいわ。……
ええ、あなたのことが大事だから」

やがて、そっと手を伸ばし、フォルは自ら薬を受け取った。
ルルがこちらへ戻ってくると、思わず言葉がこぼれた。

「……ルルは、すごいね」

「すごくないわよ」

「でも俺は、あんなふうには話せないよ」

「本心を伝えれば、相手にきっと届く。それは薬師^{くすり}として大事なこ
となの」

「ルルは、こわくないの？ 本心を伝えること」

「こわいわ。本当はこわいけれど、でも、私が向き合わないと。患
者さんの本当の気持ちを知ることはできない。知らないで、どうし
ていけばいいのかも、わからないでしょう？」

フォルの家を見つめるルルの瞳には、静かな強さが宿っているように感じた。

それがこちらに向けられて、思わずどきっとする。

「それよりツバメ」

「なに？」

「帰ったらすぐに水分を摂って。具合、ちょっと悪いでしょう」

「え、どうして——」

わかったの、と続けようとして口を閉じた。

それはもう、体調が悪いことを肯定してるようなものだ。

「見ていればわかるわ。今日はいつもより暑いし、日光に当たる時間も多かったでしょう？ そのわりに水分は摂っていなかったし」

「よく見てるね……」

「薬師だもの。あとどこか調子悪いところはない？」

「……ちょっと頭が、痛いかな」

「冷やすものも必要ね。帰ったら少し休んで」

「大丈夫だよ」

「だめよ」

ぴしゃりと言いきられ、口をつぐんだ。

その瞳には先ほどと同じような、強い意志があった。



家に帰ったあと、ツバメは水分をよく摂り、首を冷やしながらベッドに横になった。

数時間後、部屋を訪れると目を覚ましているようだ。

「具合、どう？」

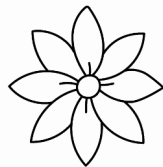
「もう平気だよ。ごめんね、ルル」
「気にしないで。誰だって体調を崩すことはあるもの」
「ルルもあるの？」

問われ、思い返す。

「ないわね」
「……ふふっ」
「もう！」
「ご、ごめん」
「小さいころは人並みに風邪をひいたりしていたけれど、最近はないのよ」
「さすがだね、薬師さん」

なんだか茶化されているような気がして、私は小さく息をついた。

「ルルはさ、なんで薬師になろうと思ったの？」
「え？」
「薬師だから、薬師として。そういう言葉をよく聞くから、どうしてかなと思って」



「あ、そろそろご飯の支度をはじめないと」
「俺も手伝うよ」
「……本当に大丈夫？」



「大丈夫！」

ツバメは自分の胸を手のひらでたたいてみせた。
暗くなりはじめた部屋を出た私たちは、キッチンへ向かった。

